

『とほすがたり』の研究

『夢』の記事について

樋口 夕子

一、研究の動機

『とほすがたり』に記されている夢は、非常にバラエティー豊かである。そのさまざまな種類の夢がいずれも二条に大きな影響を与えている。二条はこれらの夢によって、おびえたり、喜んだり、悲しんだりしているのである。しかし、これらの夢の記事については、『とほすがたり』の虚構性との問題で語られることはあっても、その夢自体中味が持つ意味について考えられることは少ないようである。

次田香澄氏は『文学』（昭和四十二年一月）の「とほすがたり構想論」の中で、「作者はとほすがたりとして、内省的な意欲と情熱とで形象化を思い立ったから、この作品には、せむし読者に訴えたいことを中心として、素材が選別、採択されている。作者は素材について、大きな感銘を受けた事柄でなければこれを書かないという大胆なところがあった。あるいはそれを意識さえもしなかったかもしれない。」と指摘されている。

古代、夢は祭式的に乞われるものであり、神仏が見せてくださる不思議なものとして、今とは比べ物にならないほど大事なものと考えられ、信じられていたという。このような夢自体の存在の大きさを考え合わせると、二条が記した夢の記事もなんらかの重要な作品構成の要素である可能性が高いのではないだろうか。私は、少なくともこれらの夢は従来考えられてるよりも、もっと大きな何かしらの意味を作品の上で持っているのではないかと考える。今回は、特に詳細に記されている『那智の夢想』を中心に、『とほすがたり』の夢の持つ意味や働きなどを探っていきたいと思う。そして、私は夢の記事へのアプローチを通して、『とほすがたり』という作品の理解へ、一歩でも近づきたいと思う。

二、『那智の夢想』

『那智の夢想』は、嘉元三年（一三〇五年）の九月二十日すぎに、二条が那智権現で見た夢である。少々長い

が、次に該当箇所全文を掲げてみたい。

形見の残りを尽して、唱衣いしいしと當む心ざしを、権現も納受し給ひにけるにや写経の日数も残り少なくなりしかば、御山を出づべき程も近くなりぬれば、御名残も惜しくて、夜もすがら拝みなど參らせて、うちまどろみたる暁方の夢に、故大納言のそばにありけるが、一出御の半ば」と告ぐ。

見參らすれば、烏褥を浮織物に織りたる柿の御衣を召して、右の方へちと傾かせおはしましたるさまにて、われは左の方なる御簾より出でて、向ひ參らせたる。証誠殿の御社に入り給ひて、御簾を少し上げさせおはしまして、うち笑みて、よに御快げなる御さまなり。また、「遊義門院の御方も出でさせおはしましたるぞ」と告げらる。見參らすれば、白き御袴に御小袖ばかりにて、西の御殿と申す社の中に、御簾、それも半に上げて、白き衣二つ、うらうへより取り出でさせおはしまして、「二人の親の形見をうらうへへやりし心ざし忍びがたく思し召す。取り合せて賜ふぞ」と仰せあるを、賜はりて本座に帰りて、父大納言に向ひて、「十善の床を踏みましましたしなごらいかななる御宿縁にて、御片端は渡らせおはしますぞ」と申す。「あの御片端は、いませおはしましたる下に、御腫物あり。この腫物といふは、われらがやうなる無知の衆生を多く後へ持たせ給ひて、これを憐みはぐくみ思し召す故なり。全く

わが御誤りなし」と言はる。また見やり參らせられたれば、なほ同じさまに快き御顔にて、近く參れと思し召したるさまなり。立ちて、御殿の前にひざまづく。白き箸のやうに、本は白々と削りて、末には榊の葉二つづつある枝を、二つ取り揃へて賜はると思ひて、うちおどろきたれば、如意輪堂の懺法始まる。

何となくそばを探りたれば、白き扇の檜の木の骨なる、一本あり。夏などにてもなきに、いと不思議にありがたくおぼえて、取りて道場に置く。この由を語るに、那智の御山の師、備後律師かくだうといふ者「扇は千手の御体というやうなり。必ず利生あるべし」と言ふ。夢の御面影も覚むる快に残りて、写経終り侍りしかば、ことさら残し持ち參らせたりつる御衣、いつまでかはと思ひ參らせて、御布施に泣く泣く取り出で侍りに、

あまた年慣れし形見の小夜衣

今日を限りと見るぞ悲しき

那智の御山に皆納めつつ、帰り侍りに、

夢覚むる枕に残る有明に

涙ともなふ滝の音かな

かの夢の枕なりし扇を、今は御形見とも慰めて帰り侍りぬるに、はや法皇崩御なりにける由承りしかば、うち続かせおはしましぬる世の御あはれも、有為無常の情けなきならひと申しながら、心憂く侍りて、われ

のみ消たぬ空しき煙は、立ち去る方なきに、年も返りぬ。(本文は福田秀一氏校注、新潮日本古典集成「とはずがたり」による。)

嘉元三年には、二条は四十八歳である。これは『とはずがたり』の終末近く、巻五の末尾(前揚書三一九頁)に記されている。そして、他の夢が長くても一頁ほどの記事であるのに対して、この夢の記述は二頁半にも及んでいる。二条は、なぜ『とはずがたり』の終末近くに、このように詳細な夢の記事を記したのであろうか。『那智の夢想』の場面をひとつひとつ追いながら、この夢の持つ意味について考えていこう。

(一) 二条の信仰と父

『那智の夢想』の最初の場面では、最愛の父久我雅忠が、後深草院のおいでを二条に告げている。この父は、二条が十五歳の時に亡くなっている。二歳のときに母を亡くした二条が、大変な「お父さん子」であったことは既に多くの研究者が指摘するところである。

この父の死は、巻一に記されている。

日の中とさし出づる程に、ちと眠りて、左の方へ傾くやうに見ゆるを、なほよくおどろかして念仏申させ奉らんと思ひて、膝をはたらかしちあるに、きとおどろきて、目を見開くるに、あやまたず見合せたれば、「何とならんずらんは」と言ひも果てず文永九年八月

三日辰の初めに、年五十にてかくれ給ひぬ。

二条は父の死に際して、念仏しているままで亡くなられたのならば、来世も安心であったのに、意味もなく起こし、念仏以外のつまらぬ言葉で息絶えさせてしまったことを残念に思い、大きな責任を感じている。二条は、その思いを生涯持ち続けていたようである。巻四に、次のような記述がある。

若宮の御社遙かに見え給へば、他の氏よりはとかや誓ひ給ふなるに、契りありてこそさるべき家にと生れけめに、いかなる報いならんと思ふほどに、まことや、父の生所を祈誓(父が来世で生まれる所が良くなるようにと)申したりし折、今生の果報に替ゆる」(この世でのお前の幸福と交換にするぞ)と承りしかば、(↑石清水八幡宮のお告げであろう)恨み申すにてはなけれども、袖を広げんをも嘆くべからず。

これは、二条の強い覚悟を示す記事である。二条の家、信仰は自分のためだけではなく、常に気になっていた父の来世への不安によるものが大きいのではなかったであろうか。『那智の夢想』には、そのように二条が心配し続け、折り続けた父の姿が現れているのである。

石田穰二氏は『源氏物語辞典』の「夢」の項において、一明石の巻の亡き桐壺の院のように、夢に故人が現れる場合、多く故人は、現在の自分の境涯を語り、それはそのまま事実として受け取られる。」と記しておられる。

そのように考えると、『那智の夢想』には父の現在の境涯が示されているとらえられる。つまり、父は今あの世でも後深草院に仕えているというのである。来世の安心は、二条が一生をかけて祈り続けた事である。二条の長年のこの願いは、熊野権現に納受されたのだ。

二条はこの夢を授かったことを、どんなにか喜んだことであろう。また、この夢は、二条をどんなに安心させたことであろうか。この夢は、まさに二条の生涯の願いの結着と言い得るものである。

〔二〕両親の形見と遊義門院

次は、二条が遊義門院から謝辞を賜るという場面である。二条は、両親の形見を大切にしてきた。後深草院の死後、二条はこの形見を手放して費用を捻出し、宿願の五部の大乘経の書写の完成に努力している。これは後深草院の追善供養のためである。院の忘れ形見である遊義門院がこれについて謝辞を下さったということは、二条にとって非常に嬉しいことであり、今までの努力が報われた瞬間であつたらう。

なお、この遊義門院については、後に詳しくふれる。

〔三〕夢の中の父の言葉

次いで、二条は、院が身体障害者であることの理由を父に尋ねるといふ場面となる。これまで見てきたよう

に、この夢は二条にとって非常に大きな意味を持つ夢と思われる。その夢で、この点は、どんな意味を持っているのであろうか。夢の中で父は二条に「あの御片端は：全くわが御誤りなし」と語っている。二条にとって、院が「片端」であつたことは、気がかりなことだったのであろう。だから、「片端」の理由が、院自身の過失によるのではないと聞き、二条は安心したのであろう。彼女の心配事は解決されたのである。しかもそれは父の語つたことであるので、間違いないと確信した事であらう。

〔四〕夢とうつつ

更に、夢の中で院より「白き箸のやうに、本は白々と削りて、末には椰の葉二つづつある枝」を賜り、目を覚まして何気なく傍らを探ってみると、「白き扇の檜の木」の骨なる「物が落ちてゐるのを見つけた」といふ場面である。

こういった話は他にもいくつか例がある。例えば『大和物語』の「生田川」（一四七段）によると、旅人が、夢ともうつつともわからない出来事（成仏できぬ男たちのおぞましい闘争）を夢に見て、朝になってみると、現実の世に血という物証が残されていたという。また『平家物語』の「大仏建立」（卷三）によると、清盛が靈夢の中で厳島明神より小長刀を賜り、目覚めてみると、実際に刀が枕元に立っていたという。

『源氏物語の精神史研究』の「源氏物語の夢の位相」の中で林田孝和氏は、「夢は現実の一現象であった。夢は人間の現在と神霊界を結ぶパイプであり、夢がうつつの現象と信じられたばこそ、夢合わせ・夢判じ・夢解き・夢買い・夢違えなどとさまざまな夢の習俗や民譚を生み落としたのであり、夢は平常の生活を越えた精神の領域で人間の生とより深く係わりを有するものであった。」と述べておられる。

前述の『大和物語』の旅人にとって、夢のなかの闘争は「うつつ」の出来事なのであり、目覚めて見つけた血は、まぎれもなく夢のなかの成仏できぬ男たちのものである。同様に『平家物語』の清盛にとって、霊夢の中で嚴島明神より賜った小長刀と、「うつつ」に枕元に立っていた刀とは同じものであり、清盛は後にこの刀を家宝とするに至るのである。

このように考えると、『那智の夢想』で二条が目覚めて目にした「白き扇」は、ただ落ちていた扇という訳ではなくて、あくまでも院からの賜り物であり、これが院の唯一の形見となるのである。（この時は、二条は院から賜った小袖をみな御布施に差し出しており、院の形見といえるものは何一つ持っていなかった。）（二条自身、「かの夢の枕なりし扇を、今は御形見ともと慰めて（都へ）掃り侍りぬるに」と記している。そしてその後、この扇は「もし僧などに賜びたき御事やとて」遊義門院に

奉っている。

院からの賜り物である「白き扇」、院の形見として大切に都へ持ちかえり、その後、遊義門院に奉った「白き扇」が、なぜ採り上げられ、多くの筆を費やして描かれているのだろうか。そして、なぜ二条はこの扇を遊義門院に奉ったのであろうか。

「白き扇」の持つ意味について、考えてみたい。

〔五〕白き扇

『新古今和歌集』の扇の用例と、『源氏物語』の「白き扇」の用例を次に検討してみたい。

『新古今和歌集』

夏はつる扇と秋の白露と

いづれかさきにおきまさるらむ

壬生忠岑〔夏歌／二八三〕

うたたねの朝けの袖にかはるなり

ならず扇の秋のはつかぜ

式子内親王〔秋歌上／三〇八〕

手もたゆくならず扇のおきどころ

忘るばかりに秋風ぞ吹く

相模〔秋歌上／三〇九〕

すずしきは生の松原まさるとも

添ふる扇の風な忘れそ

枇杷皇太后宮〔離別歌／八六八〕

『源氏物語』

「夕顔」

白き扇のいたうこがしたるを、(薫が)「これに置き
てまゐらせよ、枝も情なげなめる花を」とて、取らせ
たれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして奉らす：

(源氏は)惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧すれば、
もて馴らしたる移り香、いとしみ深うなつかしくて、
おかしうすさみ書きたり。「心あてにそれとぞ見る白
露の光そへたる夕顔の花」

「東屋」

(薫が)「…さる所には、年頃、経給ひしぞ」と、の
たまへば、(浮舟は)いと恥づかしくて、白き扇をま
さぐりつつ、添ひ臥したるかたはら目、いと隅なう白
うて、なまめいたる額髪も隙など、いと、よく思ひ出
でられ、あはれなり。：(薫が)「楚王の台の上の、
夜の琴の聲」と誦じ給へるも、かの、弓をのみ引くあ
たりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従
も聞き居たりけりさるは、扇の色も心おきつべき闇の
いにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、お
くれたるなまめるかし。事こそあれ、あやしくも言ひ
つるかなと思す。

「東屋」の『楚王の台の上の 夜の琴の聲』というの
は、注によると、『和漢朗詠集』「雪」(尊敬)に「班
女が闇の中の秋の扇の色 楚王が台の上の夜の琴の聲」

とあるもので、漢の成帝の愛妃班婕妤が趙飛燕のために
寵を奪われ、その身を秋扇に比して怨んだという故事を
ふまえるものだという。

以上の六例から気がつく事は、扇には漢の女流詩人班
婕妤の故事がふまえられる場合が多いということである。
『源氏物語』の「東屋」に用いられた『和漢朗詠集』
には、他にも班女を詠んだものがある。

班婕妤が團雪の扇 岸風に代へて長く忘れぬ
燕の昭王が招涼の珠 沙月に當って自ら得たり

匡衡「一六一」

班女が闇の中の秋の扇の色

楚王が臺の上の夜の琴の聲

尊敬「二三八〇」

班姫扇を裁して誇尚すべし

列子車を懸けて往還せず

保胤「四〇〇」

このように、班女の扇の故事というのは当時人口に膾
炙していた。

「白き扇」の出所は、班女自身の次の詩である。

怨歌行

新裂齊紈素 皎潔如霜雪

裁成合歡扇 团团似明月

出入君懷袖 動搖微風發

常恐秋節至 涼颯奪炎熱

棄捐篋笥中 恩情中道絕

用例を見るとおり、この詩から「秋扇」「班女が扇」

などの成語が生まれ、男性の愛の薄れゆくのを哀しむ女性の微妙な心理を表象する語として使われるようになってきたようである。

このように有名な班女のご事を、二条は当然知っていたであろう。そして、『那智の夢想』の中で「白き扇」がこのように強調されているのは、班女のご事が意識されてのことであろう。けれどもこの場合、「男性の愛の薄れゆくのを哀しむ女性の微妙な心理を表象する語」として用いられていると見なすのはどうであろうか。この時二条は厄であり、もはや若くもなく、第一、院はずでに亡き人である。それでは、この「白き扇」は、いかなる意味の表象として用いられているのであろうか。

「漢書」外戚伝「六十七下にある班婕妤の伝記を見ると、班女は二条とよく似た人生を歩んでいることに気がつく。その主な共通点は、

①帝の寵愛を大いに受けていた。

二条：後深草院

班女：孝成帝

②帝の男子を生んだのに、数カ月で亡くした。

二条：八カ月

班女：数カ月

③後に寵愛を失った。

④ライバルにより御所を退出した。

二条：東二条院

班女：趙飛燕

このような共通点を確認すると、二条と班女は、それ

ぞれの帝との関係で、共通点が指摘できる。そして、二条はこの点を意識していたと思われる。

班女は、唯ひたすら孝成帝に自分の生涯を捧げ尽くした女性として知られている。「秋扇」のご事を用いるときに、①男性は、高貴な人であること。②女性は、ひたすらその男性に身心を捧げきっていること。③という二つの条件は、欠かすことが出来ないであろう。二条は院から賜った「白き扇」を通して、自分の人生を班女の人生とオーバーラップさせることにより、あくまでも院に自分の一生を捧げ尽くしたこと、自分の人生は院とともにあったのだということを、再確認しているのではないだろうか。この「白き扇」は、二条の院へのひたすら愛の象徴なのである。

〔一八〕『更級日記』における『阿弥陀仏来迎の夢』

『更級日記』にも、多くの夢の記事が見られる。なかでも『阿弥陀仏来迎の夢』は、「とはすがたり」の『那智の夢想』と、夢が作品形成のうえに持つ意味において類似性が認められると思われる。

『古代人と夢』において、西郷信綱氏が『更級日記』の夢について以下のように記しておられる。（『蜻蛉日記、更級日記、源氏物語のこと』）

…かの女の頼みとするのは、弥陀来迎のこの夢であった。日記にはそうは書かれていないが、これは日夜、

法華經を誦し、おそらくは泣きつつ念仏を唱えて極樂に往生せんことを願ったしるしとして得られた夢に相違ない。そしてかの女は、このすでに到達された帰結に立ち、それに照して来しかたをふりかえるという姿勢で、この日記を綴っている。

：弥陀来迎の夢が、当時の人にいかに貴くありがたいものであったか、想像にかたくない。それは疑いなく極樂に往生する保証みたいなものであった。おそらく、この来迎夢を授けられたのが有力なきっかけになり、「東路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でた」少女時代このかたのことどもが一挙に想起され、それらをたぐりよせながら日記にするすという次第になったのだろう。

：更級日記が来しかたを懈怠にみちたものとし、いとはしむと悔恨の情で以てふりかえる形になったのは、かく辿りついた結論がまずあり、それに頼むところがあつたためだが、しかしそこに作者の歩いてきた道がとにかく一つの図形となつて描き出されている事實は認めなければならぬ。それはその結論がたんなる抽象概念でなく、一生を棒に振つてようやく手に入れたものであることに関連するであらう。弥陀の夢は作者の人生におけるもっとも確かな経験であつたらしい。これまで考えてきたように、「那智の夢想」は二条の信心が熊野権現に受け入れられたことを示す夢である。

そして、二条の心配事を解決し、また、二条に人生を振り返らせる働きをしている。二条は、この夢を、神仏からの授かり物である確かな事實、長い人生でようやく辿り着いた到達点と受け止めたと考えられる。

二条は『更級日記』の作者と同様に、この「那智の夢想」という人生の確かな結論を得ていたからこそ、自分の人生を「とはすがたり」したいという衝動に駆られたのではないだろうか。そして、その結論に辿り着くまでの自分の歩みを「とはすがたり」として振り返つたのではなかつたか。『那智の夢想』は「とはすがたり」の執筆動機に深く関わりを持っているのではないかと考えられる。この「とはすがたり」の執筆動機について、詳しく考えていくことにしよう。

三、「とはすがたり」の執筆動機

（一）従来の諸説

『とはすがたり』の後編（巻四、五）には、前編（巻一〜三）に比べて多くの歌が掲載されている。また「和歌の夢想」「人麿の夢想」が記されていたり、人麿影供を現実に行つたという記事があるなど、二条の和歌に対する強い思いが記されるようになる。このことから「末尾に記された和歌の家への執着は、本書の執筆動機と関係があるかも知れない。永年の詠草の整理がきっかけと

なつたこともあるが、家名、父の名を残すということ
は、彼女自身の生涯の決算を思い立つことにほかならな
かった。」（松尾葦江氏「後深草院二条のからだ」とこ
ろ）『国文学解釈と鑑賞』昭和六十三年九月）「こうし
た先例（先行日記文学から勅撰集に入れられている例が
あること）を知る作者は、当時頻繁に行われる撰集に、
自分の作品からの採択をひそかに期待していたものではあ
るまいか。」（次田香澄氏「とはすがたり構想論」『文
学』昭和四十二年一月）などと言われてきている。この
ようなことから、『玉葉和歌集』への入集を目指したの
か、遊義門院を特定の読者と定めて執筆を行ったのかと
いう両説が『とはすがたり』の執筆の動機として論及さ
れているのが現状である。

二条は「竹園八代の古風」という、強い家意識を持っ
ていた。これは、久我家が村上天皇の皇子具平親王から
出て、雅忠まで八代の輝かしい伝統を持っていたからで
ある。そして、歌道でも伝統の家であるという、大きな
誇りを二条は持ち続けていた筈である。しかし現実には、
代々勅撰集に入集していた亡き父雅忠の歌が、『新後撰
集』にもれてしまったのである。嘉元元年に二条為世に
よつて奏覧された『新後撰集』は持明院統の歌人の入集
に薄かったから止むを得ないといえるが、二条のシヨッ
クはいかばかりであつただろうか。この後、二条は和歌
の家の再建を目指して歌道へ精進に心しており、『玉葉

和歌集』への入集が二条にとって大きな願ひであつたこ
とは想像に難くない。だからといって、それが果たして
『とはすがたり』執筆の最大の動機と言えるのだろうか。

（二）『和歌の夢想』 『人麿の夢想』

二条は、代々勅撰集に入集していた亡き父雅忠の歌が
『新後撰集』にもれてしまった事を知り、「竹園八代の
古風、空しく絶えなんざるにや」と悲しく思い、父の墓
前で繰り言を言つたと『とはすがたり』の中に記してい
る。そのようなときに、二条は『和歌の夢想』をみた
いうのである。

『和歌の夢想』とは、二条が父の三十三回忌を営んだ
四十七歳の九月に神楽岡（葬祭場）で見た夢をいう。二
条にとつて、父から授かつたという内容の夢である。

かやうに口説き申して帰りたりし夜、昔ながらの姿、
われも古への心地して、相向ひてこの恨みを述ぶるに、
「祖父久我大相国は落葉が峯の露の色づく言葉を述べ、
われは『おのが越路も春の外かは』と言ひしより、代
々の作者なり。外祖父の兵部卿隆親は、鷲尾の臨幸に
『今日こそ花の色は添へつれ』と詠み給ひき。いつか
たにつけても、捨てらるべき身ならず。具平親王より
このかた、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶え
せず」など言ひて、立ちぎまに、

なほもただかきとめてみよ藻塩草

人をも分かず情ある世に

とうち詠めて、立ちのきぬと思ひて、うちおどろきしかば、空しき面影は袖の涙に残り、言の葉はなほ夢の枕にとどまる。

この夢の中で、「父方母方のいづれにつけても、お前は歌道で捨てられる筈の身ではない。具平親王よりこのかた、未代になったといつても、和歌の道は絶えず続くはずだ。」と父は二条に告げている。彼女にとって、この父の言葉は、なんと心強いものであったことか。父の言葉で希望を与えられた二条は、これ以後特に歌道に精進し、人麿の墓に参籠するに至るのである。墓前で七日目にあたる夜に『人麿の夢想』を授かったとき、二条は神仏への自分の思いが通じている事が確信でき、和歌の家の再建という宿願が将来かなうのではないかという希望を持たたのではないだろうか。

『和歌の夢想』『人麿の夢想』は、このように二条に勇氣と希望を与えた夢なのである。これは『那智の夢想』と同様、二条の信心が神仏にとどき、受納されられたことを意味する夢でもあった。

『とはすがたり』の跋文によると、

…去年の三月八日、人丸の御影供をつとめたりしに、今年の同じ月日、遊義門院の御幸に参りあひたるも不思議に、見しうば玉（『那智の夢想』）の御面影も、現に思ひ合せられて、さても宿願の行く末いかがなり

行かんとおぼつかなく、長年の心の信もさすが空しくらずやと思ひ続けて、

と、二条は遊義門院との邂逅を得たことは『那智の夢想』のお陰であり、「人丸の御影供」によると思ひ合わせている。遊義門院との邂逅の持つ意味について、作者にしたがって、この二つの面から考えてみたい。まず、『那智の夢想』に遊義門院が登場し、その後大きく遊義門院のことがクローズアップされている理由について、一晩年の皇室信仰である。「（次田香澄氏）「遊義門院が実は二条の実の子供であるからだ。」（宮内三二郎氏）などと言われている。しかし私は、『那智の夢想』への遊義門院の登場は翌年の八幡での偶然的邂逅を予告（お告げ）しているとともに、二条が遊義門院を院の忘れ形見として院亡き後に一筋に愛を捧げるべき人である事を、神仏から啓示されているのであると理解したい。夢の中で院から授かった「白き扇」を、後に遊義門院に献上していることは、この事情を示しているに他ならない。

院のために両親の形見を手放したことに對して、夢の中で遊義門院から謝辞をいただいた喜びは、二条が今は亡き後深草院へひたすら向けてきた一筋の純愛を、今度は忘れ形見の遊義門院へ向けさせることとなったのだ。そのように理解すると、八幡で遊義門院に肩を踏ませたことも、過剰な奉仕とは読み取れない。むしろ、今の二条に残された、自然な愛の仕草なのであっただろう。こ

れは晩年の班女の姿とも重なる二条の姿とも言えるのではなからうか。

次に、遊義門院との邂逅に重なった偶然について考えてみたい。その偶然とは、ひとつは、石清水八幡宮で遊義門院の邂逅を得たこと、もうひとつは、跋文に記された「人丸の御影供」との日付の符合である。この偶然に次ぐ偶然は、二条に神仏の御加護を確信させることとなったであらう。

では、ここでの神仏の御加護とは、どんな御加護なのであろうか。二条がこの邂逅を、人丸影供と結び付けていることからみて、神仏が久我家の家運ないし歌道再興の宿願の後楯となり、後援者と巡り合わせてくれたと考えたのではないだろうか。院の忘れ形見である遊義門院との出会いは、それだけで充分二条にとって感激であったが、神仏のおかげで更に門院とのご縁によって、これから先に勅撰集の撰集があった時などに、作者は遊義門院を通じて入集の運動もすることができると考えたと違いない。家の再建や、勅撰集への入集というのは、後楯のない二条には困難であった。それだけに、遊義門院との邂逅は二条にとって大きな希望を抱かせることになったといえるであらう。

先に述べたように、二条にとって、『那智の夢想』が予告した、遊義門院との偶然の邂逅は、二条の信仰心が神仏に受け入れられたことを確信させる出来事であった。

跋文において、そのような出来事を思い返したあとに、二条は「宿願の行く末がどうなっていくことだろうか」と気がかりで、長年の私の信心もさすがに無駄にはなるまいと思いつけて」と記している。この「宿願」について福田秀一氏は、「通説に五部大乘経書写の宿願とするが、むしろ久我家の家運ないし歌道再興の宿願であらう。」と注しておられる。この福田氏説に従うならば、二条は『那智の夢想』や遊義門院との偶然の邂逅などを得たことによって「私の信心は神仏に受け入れられている（と二条は確信を得ている）のだから、気がかりな宿願ではあるが、これもきつといずれ実現し、家の再建がはかれるのではないかと、希望を持ったのではないだろうか。このような確信は、二条の宿願が神仏の御加護を得て自信となっていたと思われるのである。

そこで、『とはすがたり』の執筆動機は、以上見てきたように、『玉葉和歌集』への入集ということとは、二条も当然意識していたであらうと思う。しかし、それが最大の執筆動機であるとすることはやはり承服できかねる。第一、遊義門院を特定の読者と定めて執筆を行ったと考へることは不自然である。いくら当時とはいえ、二条のような立場の者が、巻一から三に記されているような雪の曙や有明の月との密事を書き立て暴くことは、あまり誉められることとは言えないであらう。『玉葉和歌集』への入集だけを指したのであれば、むしろ、このよう

な巻一から三の記述は必要ない。遊義門院が後深草院の娘である事を考えればなおさらの事である。

二条は『和歌の夢想』『人麿の夢想』『那智の夢想』の夢や、院や遊義門院との八幡宮での偶然の邂逅といった出来事によって、自分の願いが神仏に受け入れられたことを確信し、そのことによって、唯一気がかりな我家の家運ないし歌道再興の宿願についても必ず実現するだろうという希望（見通し）を持つに至ったのではなからうか。私は、『とはすがたり』の最大の執筆動機は、『那智の夢想』によって、自分の歩んできた人生が決して間違ったものでなく、意味のないものでもないと感じ、そんな心境に辿り着くまでの院との歩みを、とはすがたり“したいという衝動に駆られたと考えたい。

そのように見ると、雪の曙や有明の月との恋が赤裸々に描かれていることも、当然のことであると言えるだろう。

四、後深草院二条と夢

夢は神仏が見せてくださるもの——。これはこの時代の通念であり、信仰であった。『とはすがたり』の夢は、非常にバラエティーに富んでいるが、どの夢も、二条はそれぞれ神仏の啓示としてしっかりと受けとめ、それを信じている。『とはすがたり』に記された夢の中で

意味を持たない夢はなく、どれも二条の人生に大きな影響を及ぼしていると言える。この点は『とはすがたり』の夢の大きな特徴と言えるよう。

夢は、ある時は二条を勇気づけ、ある時は二条に何かを確信させ、またある時は二条を震撼させた。このように『とはすがたり』において、夢の記事は非常に大きな意味を持っており、作品形成の上で大きな役割を果たしていた。

二条には、夢を疑ったり拒絶したりする態度は見られない。他の作品を見てみると、例えば『蜻蛉日記』は夢に対して独特の醒めた態度が示されており、また、夢に対して信頼の厚い『更級日記』にも強い印象を残した三つの夢が空振りであったとの記述がある。『源氏物語』の正篇は、夢の啓示や予告の通りに現実が展開するが、浮舟物語の夢はその様相を異にしている。浮舟は、長谷寺への夢のお礼参りの勧めを拒否するのである。これは正篇には見受けられなかった、夢への拒絶である。

これらの作品より時代の下った『とはすがたり』において、夢に対する疑いがひとつも記されていないのは、二条の、夢に対する強い思いを物語っていると言える。また、自分の“とはすがたり”したいことを書くために自分にとって意味ある夢だけを記すという（素材を厳選している）、二条の執筆態度を示しているところもあることもできよう。

夢は消えやすく、忘れやすい。夢の中で夢を記録することは出来ず、夢を思い出し、記録するのは覚醒時においてであるので、いくら私達より夢に対して敏感であった時代とはいえ、『とはすがたり』に記されている夢が実際に見た夢とどこまで一致しているかは疑問がある。特に『とはすがたり』は晩年のある一時期に執筆されたものとされているために（手控えはあっただろうが）、

これらの夢の記事の事実性には疑問が持たれている。またこれらの夢は出来すぎているとの指摘もあり、そのようなことから、『とはすがたり』の虚構性との問題で語られる場合が多い。しかし、これらの夢を一概に虚構であるとする根拠もなく、また、作品構造の上から夢を無視してはあまり意味がない。二条の場合、例えば妊娠などといった実際の出来事と結び付けて夢を思い返すことが多いため、無意識のうちに夢が出来事と密接に結びついた形に再構成されたり、また執筆の際に、その夢の持つ重要性を再認識して、その意味を強調しようとした可能性はあり、そういったことが、これらの夢をいわば『出来すぎ』と感じさせているのかもしれない。しかしこれは、今となっては推測する外ないことである。それよりも、二条がまさしくこういった夢を見たと思ひ、『とはすがたり』に記しているということが大切なのである。

『とはすがたり』の虚構性を問題とする時、これらの

夢を二条の人生に組み入れるか否かという点で推論が分かれるのであるが、私は、これらの夢は二条の人生における確かな事実であり、二条の人生の重要な一部分をなしていると考えたい。事実か虚構かといった問題をはるかに越えたところに、これらの夢は存在しているのではないだろうか。

（上田市役所勤務）